

隠れていた木

「ありがとうございます。お気をつけて。」
店主の声を背中に受けて、外に出る。

その言葉が、私を守ってくれるかどうかは知らないが、幼い頃、母親に「行ってらっしゃい」と見送られた朝を思い出す。

店の扉を開け、まっすぐ歩いて行けば、私の勤務先だ。

約四百五十歩目に、私の好きな木が左手に顔を出す。

思わぬところに、木は隠れている。

小さな家を取り壊されて、駐車場になったとたん、一本の木が見えた。

嬉しかった。

東京の真ん中のオフィス街に、見上げるような木が出てくるなんて。

葉は深い緑色で、全体的には地味な木だ。

何の木か知らない。

けやき、松、楠、柳。そのどれでもない。

つまり、私が名前を知らない木だ。

ドングリのなる木かもしれないと、私は思っている。

店の帰りに、その木を眺めて、私は午後の仕事に戻る。

店主と、たくさんおしゃべりしてくる日もある。

お客が珍しくたくさんいて、黙ってご飯を食べてく
る日もある。

おしゃべりした日は、ちらっと木を見る。

黙ってきた日は、ゆっくり歩いて木をじっくり眺め
る。

台風の日、翌日が心配だった。

枝が折れているのではないかと。

わざわざ早起きして会社に行った。

回り道をして、木を見た。

大丈夫だった。

水をいっぱい吸って、いつもより元気そうに見え
た。

二階建の古い家に、その木は、寄り添うように立っ
ている。

窓から手を伸ばせば、枝に届くような気がする。

いいなあ。

私はそう思うのに、昼間、その家の窓があいている
ところを見たことがない。

雨戸が閉まっていて、家と木は、互いに並んでいるだ

けだ。

あの家の人は、あの木が嫌いなんだろうか。

以前からあるから、しょうがないと思っっているの
だろうか。

もったいない。

その家の玄関で、「すみません」とお願いして、あの
木をもらってきたくなる。

猫の子と違い、抱いて帰るわけにはいかない。

悔しい。

てぶんの木の葉は、空高くゆれている。

低いビルに囲まれて、でも、空に目をやれば、たっぷ
りの空。

家が建っている小さな地面の水を吸い上げて、あの
てぶんの葉まで運んでいる。

根は、案外隣のビルの敷地まで行っているのかもしれ
ない。

隣だの、他人の家だのという境界線を飛び越えて、

あの木は、根を広げ、枝を広げている。

私は、吸い上げられていく水になる。

不思議な気持ち。

昼ご飯を食へに行く店があの家だったら、最高だろ
うな。

私は想像する。

ご飯を食べ終わって、お茶とあんみつでゆっくりしたら、二階の階段を下りていく。

降りる前に、もう一度、窓から見える木を眺める。

ちよっと前まで若葉だったのに、もうすっかり濃くなつた。

「お気をつけて」

店主の声が聞こえる。